

徐謙夫搜集・整理『司馬遷の伝説』（北京文化芸術出版社、一九八七年）  
徐謙夫編著『韓城旅游景点故事』（北京師範大学出版社、二〇〇二年）  
陝西省文物管理委員会「陝西韓城芝川漢扶荔宮遺址的發現」《考古》一九六一—三）  
徐衛民「扶荔宮与挾荔宮」《考古与文物》一九九二—一）

## 「郭沫若旧宅」を訪ねて

柿 沼 陽 平

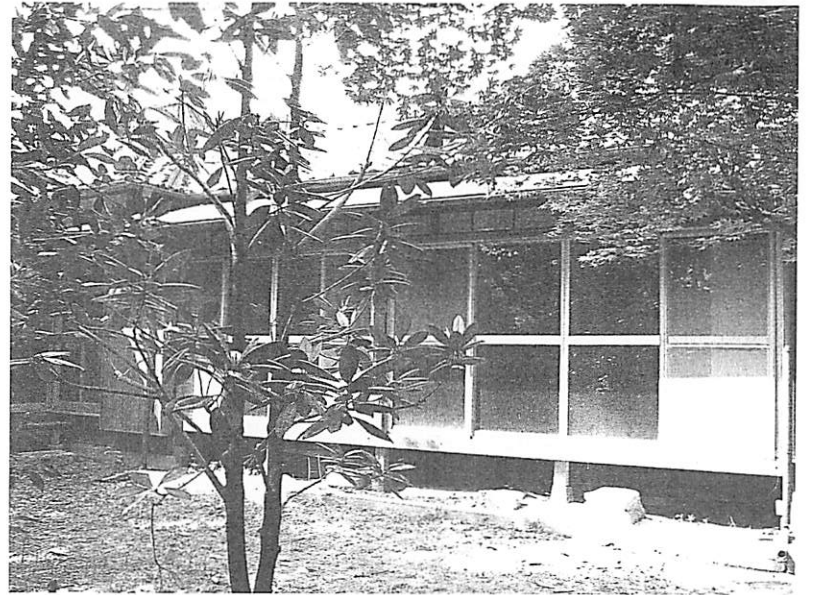
二〇〇四年五月一日、工藤ゼミ一行は、千葉県市川市にある「郭沫若旧宅」（以下「旧宅」と略称）を訪れた。市川市の市制七〇周年を記念して、「旧宅」が真間五丁目公園に移築されると聞いたからである。「旧宅」は、郭沫若（一八九二—一九七八）が一九二八年二月から一九三七年七月まで暮らした住居である。当時、郭沫若は蒋介石と対立し、日本への亡命を余儀なくされ、そのうえ多額の懸賞金までかけられていた。そのため、大衆小説家の村松梢風らが協力して、郭沫若のために市川の「旧宅」を手配したとされる。郭沫若はこの「旧宅」において、『中国古代社会研究』・『甲骨文字研究』・『两周金文辞大系』・『金文余积之余』・『殷契粹編』・『石鼓文研究』などの大著を書き上げた。

早朝より市川真間駅で集合した一行は、まず須和田公園にむかった。園内には郭沫若のレリーフと、彼が著した「別須和田」と題する詩の銅版が記念として残されていた。そこから徒歩で約一五分、静かな住宅街の中に「旧宅」があった。残念ながら、その時は係員不在のため、内部を参観することができなかった。そこで「旧宅」背面の駐車場から外観を写真に収めた（写真一）。なお後日、ゼミ生の小幡みちるさんとその妹かおるさんが、再度「旧宅」に赴き、内部を参観したが、そのときに撮ったのが写真二である。内部には隠し扉などがあり、追われる身であった郭沫若の労苦がうかがえる。

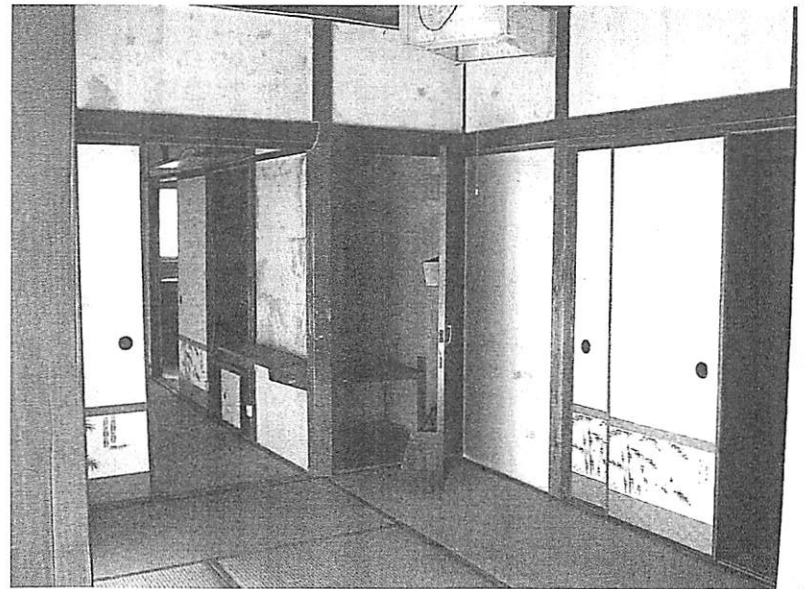
（追記）「郭沫若旧宅」は二〇〇四年九月三日に「郭沫若記念館」として再オープンした。本来の「郭沫若旧宅」を訪れたのは、われわれが最後であったらしい。

## 執筆者紹介

- 浅野 裕一 東北大学教授  
王 然 武漢大学教授  
王 明 珂 中央研究院歴史語言研究所副所長・同研究員・台湾大学兼任教授  
小澤 正人 成城大学短期大学部助教授  
工藤 元男 長江流域文化研究所所長・早稲田大学文学学術院教授  
谷口 満 東北学院大学教授  
平勢 隆郎 東京大学教授  
楊 華 三峡大学三峡文化研究中心  
李 成 珪 ソウル大学教授  
小林 岳 早稲田大学高等学院教諭  
小幡みちる・森和・柳美那 早稲田大学大学院文学研究科COE客員研究助手  
水間大輔 早稲田大学文学学術院第一文学部東洋史学専修助手  
岡本真則・柿沼陽平・本間寛之・渡邊将智 早稲田大学大学院生  
池田淳一・小久保春海・小森浩二・直井晶子 早稲田大学大学院修了



(写真一)「郭沫若旧宅」背面外部



(写真二)「郭沫若旧宅」内部

編集後記

本研究所は二〇〇四年七月二四日(土)、二一世紀COEプログラム関連シンポジウムとして「楚文化研究の現在」を開催致しましたが、学期末であるにもかかわらず、九二名もの多くのご出席を賜りました。本号の前半では、前号と同様の体裁をとり、シンポジウムの報告・質疑応答を特集として組みました。当日は五人の先生方に学術的に価値の高い報告を賜りましたが、ご出席の方々からも今後本研究所が研究を推進するうえで貴重なご意見を多数いただきましたので、質疑応答もそのまま掲載致しました。当日ご出席の方々に、この場を借りて改めて御礼申し上げます。(柿沼)

〔附記〕本号は二一世紀COEプログラム「アジア地域文化エンハンシング研究センター」における研究成果の一部、また科学研究補助金(代表工藤元男、基盤研究C(一般))「秦簡・楚簡よりみた中国古代の地域文化の研究」の研究成果の一部、また中国教育部哲学社会科学研究重大課題攻関項目「楚簡総合整理与研究」(首席專家・武漢大学・陳偉教授、03JZD0010)資助による研究成果の一部である。

長江流域文化研究所年報 第三号

二〇〇五年一月三十一日 発行

編集・発行 早稲田大学長江流域文化研究所

〒一六二一八六四四 東京都新宿区戸山一―二四―一

早稲田大学文学学術院 工藤研究室内

電話 〇三―五二八六―三七〇〇

印刷 株式会社アープ

〒一六二一〇〇四一 東京都新宿区早稲田鶴巻町三〇二

電話 〇三―三三二〇三―六五六〇